

秀歌三十首十今年の収穫

山口明子

一幕の芝居が終わり湧きおこる拍手のように

夏草に風

十月号・佐久間得幸

首すじに腕からませて聴いたのは銀河を浮か

べる闇の心音

清水あかね

寺多き坂を登れば高気圧の翼をひろげ夏空は

あり

松岡 秀明

栗の木の花咲ききつて香り立つ義母はゆきた

り朝雲の上に

十一月号・石田 郁男

夏蛙のじゅばつと水に鳴る音狂いそうなる暑さを思つ

中西由起子

広島の七十一年前夏蟬の鳴き声したのだらうか

高山 邦男

いのちまで透けてゐるなり生れたての蟬が

櫻の幹にすがりて

井関 輝美

バーナーの勢ふ音の響く部屋モーター喰らせ

樞押し込む

小山 芳美

手術後にそつと見上ぐる秋の空雲の白さが精
彩放つ

十二月号・木原美佐子

怒りたるままに死にたる蟻の秋風に吹かれ
はつか転がる

織田 令子

何時まで仕事かという母の問い合わせナモミのよ
うにくつづけて出る

佐々木寛子

月光に立てば湖さわだちて光求めてとぶ銀の
魚

一月号・水野 利顕

人の住まずなりし邸の暗がりの木々がほのか
に月に濡れいる

前川多美江

北海道生まれの水牛 人を運ぶたつきの途次
に夏空見上ぐ

屋良健一郎

「ルノアール地下店」閉店されどなお千の短
歌は天井を舞う

山下 雅人

いのちまで透けてゐるなり生れたての蟬が

櫻の幹にすがりて

井関 輝美

研ぎあがる包丁當つれば大根は空氣切るごと
す一つと切られたり 二月号・北澤 道子

我は立ちをり

佐佐木 賴綱

真昼間の白波とともに辛きことループヘッド
に碎け散りたり

桐谷 文子

冬の夜の石焼き芋屋ぼーという音が昭和の路
地を伸びくる

三月号・大谷ゆかり

やがて来るだろう破局は 不意打ちにパール
のビアス渡してみたが

加古 陽

一枚の紙の力で人は飛ぶ フライトチケッ
ト、人事発令

笹 本 碧

坂道のかたむく角度でおおぞらもぐらり傾く
あなたのほうへ

吉野美野里

幸せになつたなつたと言ひしのちやかんのや
うに泣きじやくるひと 四月号・萩野 聰

帰る日を偽りし日々も過去として遺骨還り

来小さく軽く

五月号・伊藤 深雪

地平線 視線でなぞる心地良さこの弧の星に